

小学校と地域社会

伊藤英彦

- I はじめに
- II 子供をとりまく環境
- III 金蔵小学校
- IV 地区と小学校
- V 統廃合問題をめぐって
- VI おわりに

I はじめに

金蔵小学校の校下は、金蔵という坂の多い地区の中で完結している。この全校児童20名程度の小さな学校に興味を持ったのは、少なからず木造校舎に対する懐古的な気分も手伝ったものの、この点からであった。金沢市内には、小学校の校下という単位が町内などの統合に大きく影響している例がいくつも見られるが、この金蔵地区における地区と校下というふたつの、そして同一の範囲である単位の関係については、調査時にも興味を覚えることがしばしばあった。小学校に関して見ると、校下と地区の範囲が一致しているということで、周囲の地域ないし町野町、輪島市全体との関係を見る場合に、金蔵地区は必ずしも完全に独立しているとは言えないまでも、ひとつの単位として見ることはできるのではないだろうかと考えた。

この報告では、1988年7月の調査によるデータと、その調査の際に金蔵小学校や地区の方々からいただいた資料などに基づいて、主に金蔵地区の人々と金蔵小学校との関わりということを中心に、地区の子供をとりまく環境や、教育、学校の実態について見ていく。その上で、地区の人々の教育のあり方や、教育に関する意識などについて明らかにしていきたい。順序としては、まず子供をとりまく環境としての金蔵地区や町野町と、金蔵小学校について紹介し、その後2、3の例から金蔵小学校と地区との関わりについて見ていくことにする。

II 子供をとりまく環境

金蔵小学校について見ていく前に、金蔵地区の子供たちをとりまく環境について、特にその教育に関係してくると思われる事柄について見ていくことにする。「教育」とひとことで言ってしまうと、問題が曖昧になるきらいがあるが、ここでは学校での教育に限らず子供に対しての教育一般について、またその環境について見ていくようにする。

まず、金蔵小学校の児童の家庭の状況について、調査を行った1988年7月の時点でのデータをもとに見ていくことにする。調査当時、金蔵地区全体の世帯数は92世帯であった。そのうち小学校に通う子供のいるのは15世帯（15世帯中14世帯の子供が金蔵小学校に通っている）で、全体の16.3%になる。各世帯については表－1のとおりになっている。まず、表に「保護者」としてあるのは基本的に児童の父親で、普段父親が自宅で働いている世帯は15世帯中に僧職の世帯Eと漆器業の世帯Kの2世帯のみである。また、表－1には明らかにしなかったが、15世帯の内9世帯では両親が共働きである。つまり、小学生が学校から帰ってきた時に両親が家にいない世帯が約半数なのである。ただし、世帯C、D、Gを除く12世帯は、3世代同居の直系家族あるいは拡大家族なので、ほとんどの場合には親の代わりに子供のために食事の用意などをする人がいるということになる。また15世帯中11世帯では、子供から見た祖父母が世帯主であることも表からわかる。小学校に限らず、範囲を広げて高校生まで（高校生を含む）の子供がいる世帯全体について見てみると、28世帯のうち17世帯で両親が働きに出ている。さらに28世帯中22世帯が農業を行っており、そのうち17世帯が二種兼業農家である。言い方をかえれば、このような世帯に子供がいるのであり、このような世帯が学校と直接の関わりを持つのである。

また、表－1から子供の数が2～3人という世帯が多いのに気が付く。高校生までの子供のい

表－1 金蔵の小学生を持つ世帯（1988年7月）

世帯	小学生	保護者	両親	祖父母	他の子供	その他	備 考
A	△○△		○	▲○	○		町野小へ通っている
B	△○	会社員	△○	▲○	○		
C	△	会社員	▲○		○○		
D	○△○	会社員	▲○		△△○△		調査後、金沢へ転出
E	○	僧 職	△○	▲○		○	
F	△	会社員	△○	▲○	○		
G	○	船 員	▲○				
H	○△	会社員	△○	▲○	○		
I	△△	銀行員	△○	△○	△	▲○△	世帯主は伯父にあたる
J	○△	公務員	△○	▲	○	○	
K	○△	漆器業	△○	▲○			
L	△	会社員	△○	●	△△		
M	○	会社員	△○	▲○	○○		
N	△	無 職	○	▲○			
O	○	会社員	△○	▲○	○		

※ △は男性、○は女性ひとりを示す。▲、●は世帯主。子供は左側ほど年上。
（一部、金蔵小学校「昭和63年度・学校管理運営計画」による）

る28世帯で見ても、子供が3人の世帯が11世帯で最も多く、2人の世帯が10世帯でそれに続いている。28世帯の平均を出してみると2.5人になる。中には子供が8人ある世帯というものもあるが、もちろん、ひと組の両親の子供である。表-1の15世帯の、世帯構成人数の平均は6.4人である。地区の92世帯全体と比較して見ると、金蔵地区には1～3人の世帯が多く平均が3.7人であるから、小学生のいる世帯の平均構成人数は地区全体の倍近くになる。

続いて、地区の単位で行われている教育に関する活動について、子供会の例から見てみることにする。¹⁾ これは子供会以外に、地区を単位として子供と関わる具体的な活動が見られないということもある。金蔵地区の子供会の発足は最近のことで、1985年である。子供会を作ったのは地区の人で、輪島市の職員をしている。金蔵地区の子供会は金蔵小学校とは直接の関係はない。子供会の対象となるのは小学生で、子供会側としては中学生にも参加して欲しいと考えているが、町野中学校に通う金蔵地区の中学生はクラブ活動で時間がないため実際には参加はしていない。金蔵地区の子供会の主な活動内容としては親子遠足、キャンプ、昼食会、クリスマス会などの行事を行い、地区の子供たちの親睦を深めたり、親子で遊ぶ機会を作ったりするといったことをしている。子供会としては毎月何かの行事を行うことを目標にしている。

金蔵地区には両親が共働きの家庭が多く、親が子供に接する機会がどうしても少なくなりがちであると考えて、子供会では親子遠足など親子が一緒に参加できる行事を企画しているのだが、実際は父親は全く参加していない状態である。大人の手の必要な場合もあって、しかたなく町野公民館の人に参加してもらい、手伝ってもらったこともあった。

子供会の会費は年間、子供ひとり当たり500円程度で、子供が多い家庭にあまり負担にならないように配慮されている。遠足などの行事の際のお菓子の代金は、そのたびごとに各家庭から出してもらい、お菓子はまとめて購入する。調査を行った1988年の時点では、子供会に参加する子供の親が勤めているスーパーマーケットから、若干値引きしてもらってお菓子を購入していた。これは、その子供が中学校に進学するなどして子供会に参加しなくなっても、地区の人と地区の子供会との関係として持続していく可能性があるとも考えられる。例えば子供会が発足した年に、子供会に参加している子供のない地区の人(元教員)から子供会旗が寄附されている。このことから、金蔵小学校における公的な教育の他に、地区においての教育を意識している人々が地区内にいると考えられる。

次に、現在の金蔵地区やその周辺の、金蔵小学校以外の教育施設全般について簡単にふれておく。まず、幼稚園については、幼稚園は金蔵地区の中にはない。町野町全体で見ても幼稚園はない。保育施設は1987年度までは1法人のもとに4施設があったが、1988年度からは町野第一保育園、めばえ保育園、町野児童館の3施設となり、いずれも広江地区にある。調査当時、町野第一保育園には金蔵からも子供が通っていた。幼稚園がないため、修学前教育ということを考えて保育園に子供を通わせる親も多いが、原則的に修学前教育を目的とした入園は禁止されているとい

うのが建前となっている。保育園児を持つ親の意識としては、地元で保育園に通わせようとする傾向が強くなってきている。²⁾

続いて、町野町の金蔵小学校以外の小学校で、金蔵地区の人々ないし金蔵小学校と多少の関係があるものについて見ておこうと思う。主なものとしては町野小学校、東小学校、寺山小学校などがまず挙げられる。それぞれ詳しいことは後に述べることになるので、ここでは簡単な紹介にとどめる。町野小学校は広江地区にあって、金蔵から比較的近い距離に位置している。創立は1876（明治9）年で、創立当時は栗蔵小学校といった。町野小学校の名称になったのは1947（昭和22年）で、学制が改められたのを受けてのことであった。金蔵から栗蔵小学校の尋常科に通った人も何人かいる。金蔵小学校と同様に校舎は古い木造だが、学校の規模ははるかに大きい。

東小学校、寺山小学校は町野小学校と比較すると、金蔵小学校とほぼ同程度の規模の小学校である。1987年度の児童数を見てみると、金蔵小学校が20名で、東小学校が44名、寺山小学校は10名である。東小学校は町野町東地区にあり、町野小学校と同様に金蔵に最も近い位置にある。金蔵地区のなかでも、場合によっては東小学校の方が距離的に通いやすい人もあるが、金蔵から東小学校に通っている児童はない。東小学校の創立は1878（明治11）年である。寺山小学校は東小学校と同じく1878年創立で、創立当時の名称は遷喬小学校といった。金蔵小学校、東小学校、寺山小学校は、現在3校合同で「集合学習」を行っている。集合学習については後に少し詳しく述べることにする。

次に中学校であるが、町野町の中学校は町野中学校1校だけで、町野小学校に隣接して広江地区にある。町野中学校へは、町野町全体の小学校の卒業生が進学する。金蔵小学校を卒業した金蔵在住の中学生は全員、町野中学校に通学している。町野中学校では、クラブ活動の指導に特に力を入れている。平日の放課後の他、土曜や日曜にも部活動が行われるため、生徒の遊ぶ時間はほとんどない。金蔵小学校の小学生について見ると、小学校から中学校へと進学するということは、ある意味で行動範囲が金蔵区内から町野町へと広がることであるという言い方もできる。

町野中学校の卒業生は、町野高校への進学者が多い。³⁾ 30人程が町野高校へ、20人程が輪島高校、10人から15人が金沢や七尾の高校へ進学するといった内訳になる。金蔵地区では、ほとんどの子供が高校へ進学する。調査当時、金蔵に在住していた高校生は、町野高校生と輪島高校生が半々といった状況であった。金蔵から輪島高校に進学する場合には、子供を輪島市内に下宿させることも多い。最近では高校の序列化が進んで学校ごとのレベルの差がはっきりする傾向にある。町野中学校の卒業生には、一時期、実業系指向が高まっていたが、現在は普通科高校を志望する傾向が強い。町野中学校では調査時の5、6年前までは、進学率は100%だったが、その後は年にひとり就職する卒業生がいる。

以上、金蔵地区の人々と関係のある保育園から高校までについて、ざっと見てきたが、もうひとつ学習塾などについても、少し付け加えておく。町野町全体で見ると、栗蔵地区には学習塾が

あるが、金蔵地区から通っている子供はいないようである。もちろん金蔵地区内には学習塾などの塾はない。ただし、習い事をしている子供はあり、ピアノを習っている女の子がいるし、そろばんを習いにいく子供もいる。

Ⅲ 金蔵小学校

ここでは、金蔵小学校と金蔵地区との関係について考えていく前に、金蔵小学校について、主にその歴史や現在の状況などに簡単にふれ、合せて児童数の変化についても見ておくことにする。まず、金蔵小学校の沿革について資料をもとに簡単にまとめながら、それぞれの時期ごとの、地区における教育のあり方やその変化などといったことについて見ていこうと思う。

金蔵小学校の創立は1874（明治7）年で、その前年に金蔵地区は時国区学校の校下に入っており、それ以前には、金蔵寺などの寺院で寺小屋が開かれていたという記録がある。当時の鳳至郡全体での記録によると、寺小屋において教師の役割をしていたのは僧侶や医者、村の役人、富裕な商人などで、平日授業を行うところや、農閑期にのみ行うところといったように、授業の行われる日は地域によって若干の違いがあった。寺小屋に通っていたのは、ほとんどの場合、生活にゆとりのある家の子供であった。

創立当時、金蔵小学校は慶願寺に置かれていたが、これは1872（明治5）年に学制が頒布されたことをうけて、寺小屋から形式のみ学校として引き継がれたのではないかと考えられる。その後、1875年に後谷助九郎氏方に校舎が移転された。また、翌年1876年に日吉神社の御仮屋に移転し、1877年に正願寺へ、1878年には新築された御仮屋に再び移転と、短期間にあわただしい移動があった。現在の位置に校舎が建築されたのは1906（明治39）年である。ここにおいて初めて学校としての校舎が建てられ、地区における教育というものがはっきりと独立することになったと言えるだろう。付け加えておくと、この5回の移転には距離的に大きな移動はなく、地図の上で見ると金蔵小学校は常に金蔵地区のほぼ中心にあったと言える。その他、1926（大正15）年には児童数の増加に伴って校舎が増築され、1950（昭和25）年と1958年には校地が拡張された。また、1965年には体育館が新築され、だんだん設備が充実してくる。現在の本校舎が新築されたのは1959年であった。3つの教室の他に図書室や特別教室などがあり、体育館などと渡り廊下でつながっている。

続いて、児童数の変化について、地区の人口の変化とも比較しながら見ていき、それに関連して集合学習についても簡単に紹介していく。調査当時、金蔵小学校の全校児童は21名で、学級は1・2年、3・4年、6年の3つであった（表-2参照）。教員は校長先生、教頭先生を含めて5人である。児童数が20人未満の小学校には教頭は置かれていないことになっている。⁴⁾

1920年代から現在までの金蔵小学校の児童数は、表-3に示したように変化している。表に明らかなように、1965年度から1970年度にかけての急激な減少が最も目をひく。それまでは、少な

表－2 金蔵小学校の児童
(1988年度)

学年	男子	女子	計
1 年	3	1	4
2 年	1	3	4
3 年	3	2	5
4 年	2	0	2
5 年	0	0	0
6 年	2	4	6
計	11	10	21

表－3 金蔵小学校の児童数の変化

年 度	男子	女子	計	学級
1920(大. 9)	38	39	77	2
1925(大. 14)	32	44	76	2
1930(昭. 5)	43	45	88	3
1935(昭. 10)	42	34	76	3
1940(昭. 15)	40	35	75	3
1945(昭. 20)	33	31	64	3
1950(昭. 25)	31	26	57	3
1955(昭. 30)	41	36	77	4
1960(昭. 35)	42	47	89	4
1965(昭. 40)	40	44	84	5
1970(昭. 45)	17	15	32	3
1985(昭. 60)	8	6	14	3
1988(昭. 63)	11	10	21	3

(1970年までは「金蔵小学校創立百周年記念誌」
の資料による)

くなくても50人を割らなかった児童
数がいきなり半分以上になっている。
この5年間の変化を1年ごとに見る
と、1967年から1968年にかけての変
化が最も大きく、63人から47人になっ

ている。この1965年度から1970年度にかけての児童数の変化については、金蔵地区全体の人口の
変化とちょうど重なる。この他には目立った変化はなく、1965年度以前も1930年頃と1960年頃を
中心とした山が見られる程度で、1970年度以降もほぼ安定している。1989年度以降に金蔵小学校
に入学すると思われる子供について見る限り、現在の人口や世帯のあり方から考えて、今後も数
年は児童数に大きな変化は見られないと考えられる。

現在、金蔵小学校では他の小学校と合同で授業を行う「集合学習」が実施されている。児童数
の少ない学校では、①集団学習が成立しない、②生活集団としての児童集団が成立しない、③生
活環境が単調で克己の機会がない、などの問題が生じる⁵⁾ という観点から、このような問題点
を補う目的でこの方法がとられているのである。この集合学習は金蔵小学校と、東小学校、寺山
小学校の3校の間で行われており、集合学習の中心は東小学校に置かれている。集合学習は小学
生を低学年、中学年、高学年の3つの単位に分けて行われる。内容としては音楽、体育、図工と
いった技術系の学科が中心となり、7月には全学年単位で水泳指導が行われる他、社会見学も集
合学習の中に組み込まれている。技術系の学科の授業が集団学習で行われるのは、特に体育に顕著な
ように、学年による実力の差が出て来やすい学科であるため、集団学習を成立させようとする場
合には、全学年で行うよりも集合学習の方法をとった方が指導が効率的なためである。

集合学習が年間にどの程度の回数行われるかについて、中学年の事例から見てみる。年間の指導計画表によると集合学習が行われるのは年11回で、1回の集合学習は原則として4時限に組まれている。集合学習による年間の指導時数は38時限で、その内容は表-4のとおりである。音楽、体育、図工と、それぞれ年間の授業時間の7～10%は集合学習による指導が行われる。

表-4 集合学習予定回数・指導時数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
集合回数		1	2	3		2	1	2					11
音楽科			1	2		2	1	1					7
体育科		1	2	1		2	1	1					8
図工科			2				2	1					5
特別活動		3		1				1					5
合同行事				8		4		1					13
合計時数		4	5	12		8	4	5					38

※ 合同行事：水泳教室（8時限）、社会見学（4時限）、
総合発表会（1時限）
（町野地区へき地複式教育センター1987年度「研究紀要」による）

集合学習は、児童の少ない学校での教育のひとつのあり方として実行され、研究されている。後に取り上げる統廃合と同様に、集合学習は小規模な学校の特徴であると同時に問題点でもある。金蔵小学校については、調査を行った1988年度以降も児童数が多くなる可能性が少ないことを考えても、真剣に取り組んでいくべき問題であるだろう。

IV 地区と小学校

ここでは、地区と金蔵小学校の関係について、PTAと区民体育大会を例に取りあげて見ていくことにする。特に地区の人々の金蔵小学校に対する意識や、態度といったことを中心に、その現状や変化について考えていきたい。

金蔵小学校においてPTAが組織されたのは、1948（昭和23）年のことである。学校と地区とをつなぐ組織が作られ、学校と地区の関係が双方向的な形をとったという点でこのことは地区における教育のあり方の、ひとつの大きな変化と言えるだろう。金蔵小学校のPTAの現状での主な活動としては、保護者の立場から学校側に対し要求を出すといったことをしている。学校側で、PTAの事務や会計などのPTA関係の仕事を行っているのは教頭先生で、PTA役員の組織は、次の通りになる。会長、副会長、会計（保護者、教頭の2名）、監査、幹事（2名）、学校委員（第1、2、3地区）、学級委員（1・2、3・4、5・6年）、母親代表の計14名である。なお、教頭先生以外の役員は全員が児童の保護者で、小学校に通う子供のない人はPTA役員にはならない。調査を行った1988年度の時点では、金蔵小学校に通っている子供のいる世帯は14世帯であったので、保護者が役員でない世帯は1世帯だけということになる。毎年3月末に、次の年

度のPTA役員が選出される。PTA会長は毎年、5年生の児童の保護者から選ばれることになっているが、調査を行った1988年度には、5年生の児童がいなかったため、2年生の児童の保護者がPTA会長を務めていた。それぞれ職業を持って勤めに出ているためと思われるが、PTA役員が積極的にPTA活動に力を入れているという印象はなかった。

金蔵区民体育大会は、もともと金蔵小学校の運動会であったが、児童数が少なく運動会にならないため、金蔵地区全体の行事となったものである。これには地区の人々の親睦を深める機会を作るということも意図されていた。

区民体育大会は以下のように運営される。⁶⁾ 大会は毎年10月の第1日曜日か第2日曜日に、金蔵小学校の運動場を会場に行われ、稲刈りの終わる時期にあたるように配慮されている。大会の運営にあたって、7月に準備会（実行委員会）を開く。準備会には、学校側からは校長、教頭、児童会の担当の先生、地区からは第1区、第2区、第3区の区長と、青年団、婦人会、老人会の代表が出席し、前年の反省や競技内容の検討などを行う。また、予算については、各世帯から500円ずつの賛助金を区長と校長の名で集める。賛助金は主に、賞品を購入したり、大会後に反省会を行うための費用に当てられる。反省会は、学校と地区の代表が集会所（日吉神社のお仮屋）に集まって行われる。

調査を行った1988年度には、区民体育大会は10月9日の日曜に開催された。準備会は9月16日に開かれた。大会プログラムは全員、一般、小学生、選手というように出場者を分けて組まれており、種目は全部で25であった。小学生をひとまとめにして分けているところがいかに児童数の少ない学校らしい。1988年度の区民体育大会の役員の組織は表-5のとおりで、役員数は78人である。しかし、実際はひとりで2つ、3つの係をする人や、中には5つの係に名を連ねている人もいて、役員の人数は55人、45世帯から出ている。そのうち、31世帯は小学生の子供のいない世帯である。また、名誉会長、大会長、副大会長、顧問といった役員以外の係の中には、青年団、婦人消防団などの代表の人も加わっている。表-5の係の他に、青年団は大会当日の会場の設営

表-5 1988年度・金蔵区民体育大会役員

1	名誉会長	総区長	8	用具係	7名
2	大会長	子供会世話役、校長	9	接待救護	7名(含・教諭)
3	副大会長	老人会会長、PTA会長、他2名	10	出発係	4名
4	顧問	1区長、2区長、他1名	11	審判	7名(含・教諭)
5	総務	6名	12	放送係	4名(含・教諭2名)
6	会計	2名(含・教諭)	13	賞品係	19名
7	進行係	7名(含・教頭)	14	記録係	5名

(1988年度・区民体育大会プログラムによる)

を行う。調査を行った際に、区民体育大会の運営の中心は学校になるといった話も聞かれたが、表-5を見る限り、かなり地区の組織に依存して運営がなされており、学校の行事というよりは、やはり地区の行事という印象を強く受ける。しかし最近では、地区側の人々の区民体育大会への参加が減少する傾向にあり、地区の行事としての区民体育大会が重視されなくなっている現状がうかがえる。

以上のことから、金蔵小学校と地区との関係がだんだん稀薄になってきている印象を受ける。特に、地区の側の人々の学校に対する態度が消極的なものになりつつあるように思われる。ある意味では、それは各自の職業との選択的な問題であるかも知れない。学校が教育の「専門」の機関として扱われ、位置付けられるようになったため、子供に対する教育という問題において、学校への依存の度合いが大きくなるという結果を生んだとも考えられる。確かに寺小屋以来、教育機関としての学校が地区の中に置かれ、発展してきた過程で、教育は家庭の中から外へと移行してきたのである。それがいいか悪いかということとはともかく、金蔵地区の人々の教育や学校への関心、態度について、ここにひとつの傾向が見て取れる。

V 統廃合問題をめぐって

ここでは統廃合の問題を例にあげ、金蔵地区の人々の態度などから、主に人々の教育に対する関心や意識などについて考えていくことにする。金蔵小学校に対する地区の人々の意識は、この統廃合の問題に特にはっきり表れているように思われるからである。また、地区の人々が金蔵小学校を地区の中でどのように位置付けて意識しているかについても見ていきたい。

まず、前にあげた集合学習との関係で統廃合を見ると、集合学習と統廃合はいずれも児童数の少ない小学校が複数ある場合に行われるもので、二者択一の選択技の関係にある。すなわち、集合学習が行われている間は統廃合はないと言える。集合学習は、小規模な学校をそのままに、ある程度の規模の学校と、あるいは統廃合を行った場合と同様の教育効果を期待するものであるからである。1988年度の調査当時ならびにその後3年間は集合学習が行われているため、金蔵小学校および東・寺山小学校に対して統廃合という措置がとられることはまず考えられない。輪島市の側でも、今のところは金蔵をはじめとした町野町の小規模な小学校について統廃合を考えている様子はないようである。

しかし、現在の金蔵小学校が、ある程度安定してはいるものの児童の数が少ない小規模な学校であるという点を考えると、いつ統廃合が行われても不思議のない状況にあるとも言える。とは言え、東・寺山小学校と共に行われている集合学習とその研究は、過疎地における教育のひとつのあり方として意義のあるものであり、さらに1989年度から3年間の計画で実施が決定している点で、現在の金蔵小学校はその存在意義を認められ、これが現在の金蔵小学校を存続させている要因のひとつとなっているとも言える。

しかし、輪島市全体で見ると統廃合が行われた例が何件も見られ、金蔵小学校についても、調査時の10数年前に統廃合の問題が持ち上がったことがあった。この時は、市の行政側から統廃合ということが言われたのではなく当時の校長から出た話のようであるが、結局この統廃合の話は、地区の多くの反対にあってすぐに消えることになった。

次に、金蔵小学校の統廃合の問題について、主に地区の側の視点から見ることにするが、その前に金蔵小学校やその統廃合に対する金蔵地区の人々の意識について考える際に、知っておく必要があると思われる事柄について見ておく。

金蔵地区には教員の経験者をはじめとした「知識人」の存在が大きなものであると思われる。このような人たちが何を考えているのかということについて、必ずしも明らかにしえなかったものの、あるいはこの「知識人」の人たちが統廃合に対する地区の反対意見を代表しているという言い方もできるだろう。その中には統廃合賛成派もいたのであるが。人によって解釈の違いの出るところもあるのが、誰が反対し誰が賛成したかについて、地区の人々は関心を持っていた。賛成派の人の意見としては、規模の小さい学校では十分な教育ができないということが中心で、統廃合反対派の反対理由は、地区の統合のひとつの中心として金蔵小学校は必要であるとか、母校としての金蔵小学校は存続させるべきであるなどといったものが主であった。

調査時には、金蔵小学校の統廃合について世代による意見の違いが出てきているということが言われ、大体80歳代の人々を中心に統廃合反対が唱えられ、50歳代を中心とした人々が統廃合に賛成している状態であった。この時点でも賛成派と反対派の意見は、以前統廃合が問題となった時の意見とあまり変わっていない。おそらく現時点での反対派は、実際に金蔵小学校の統廃合が問題になった時にも反対を唱えた人々であろう。統廃合反対派の多くが高齢者であることを考えると、いずれ賛成の意見の方が強くなっていくということも考えられる。

金蔵小学校の児童数が少ないままほぼ安定し、いつ統廃合が行われてもおかしくないという状況が続いていることで、現在でも金蔵地区の人々が統廃合について考えているのではないと思われる。中には母校を残しておきたいといった感傷的な意見も見られるものの、金蔵小学校の存続の問題について見てみると、地区での教育のあり方に関心を持ち、真剣に考えている人々が金蔵地区の中に多くいることが解かる。

VI お わ り に

金蔵地区では、両親が共働きの家庭が多いため、どうしても親が直接子供の教育に関係する機会が制限されている。むしろ、小学生の子供を持つ親よりも、そうでない教員経験者などの方が教育について積極的な関心を示している場合もあった。あるいは、それは公的な教育機関である金蔵小学校に全面的に教育を任せてしまうか否かの、考え方の違いであるかも知れない。しかし、小学生の子供を持つ人によって子供会が作られるなど、近年には地区の現状について考え、積極

的に地区での教育の問題に取り組んでいこうとする傾向も見られるようになってきた。

いずれにせよ、金蔵小学校は金蔵地区における教育のセンターであり、地区のほぼ中心に位置し、金蔵地区という範囲をその校下に持っているのである。地区の側からの教育について考えていくにしても、無視することのできない存在であることは確かである。地区と学校との関係には、地区の人々の教育や学校に対する、あるいは地区全体に対する関心や態度のあり方が現れる。あるいはそれが金蔵小学校に影響を与えて行くとも考えられる。以前、統廃合の話が出た時には反対意見によって実行されなかったが、何年かして再び金蔵小学校の統廃合ということが言われた時に金蔵小学校が存続できるかどうかは、過疎地における教育のあり方の問題として考えていくべきもののなのかも知れない。

注

- 1) 子供会に関する記録は、子供会の世話役の人の話による。
- 2) めばえ保育園の保母の人の話。
- 3) 町野中学校の先生の話。
- 4) 金蔵小学校の校長先生の話
- 5) 町野地区へき地複式教育センター1987年度の「研究紀要」より引用。町野地区へき地複式教育センターは東小学校に設置されている。
- 6) 区民体育大会に関する記録は、金蔵小学校の校長先生の話および1988年度区民体育大会のプログラムによる。